



# 沖縄の百年

## 近代沖縄の人びと

第1巻 人物編

新里金福・大城立裕著  
琉球新報社編  
太平洋出版社刊

沖繩の百年



で示したが、これは、まず沖繩近代史に関係の深い人物に興味をみちびきながら、各記述をつうじてひろく沖繩近代史への理解をたすけることをねらいとして行なった。

この作業と総索引の作成には新里氏と我部政男氏ならびに琉球新報社東京報道部長石野朝季氏があたった。

年表の作成には我部氏と石嶺伝勇氏があたった。

文献目録の作成には新里氏と我部氏があたった。

6 各事項末に、@（新里氏）・◎（大城氏）印を付して、執筆分担を明示した。

7 以上の作業は、多面にわたる興味深い記述とあいまって、本書を、いわゆる読物Ⅱ沖繩近代史事典たらしめることを目的としてなされたものである。

8 本書が多く読者に、芳醇・多彩な沖繩の文化への開眼と、深刻・多岐を極める近代沖繩の歴史への関心をわずかも提供できれば、さらに本書が、近代日本史の欠落と、分断された民族の心の空洞をわずかも埋めることができれば、幸いである。

一九六九年九月

太平出版社 編集部

### 沖繩の百年 第一巻Ⅱ人物編 近代沖繩の人びと

解題および凡例 ..... 太平出版社 1

ペ	リ	ー	沖繩を「東洋確保の海上基地」に 「黒船」で那覇寄港.....	11		
ペ	ッ	テ	ル	ハイム	聖書を琉球語に訳す 10年も布教続ける.....	13
恩	河	朝	恒	朝恒	「おんこうが」 非連な「信念の人」 幕末「白黒抗争」の犠牲に.....	16
牧	志	朝	忠	朝忠	「まきちゆうちゆう」 外交通事で活躍 謎の死とげた「島津派」.....	18
松	田	道	之	道之	「まぢつたみちゆきだ」 廃藩置県の琉球処分官 一部士族の反対押し切って.....	21
尚	泰	た	し	い	最後の琉球国王 多難な時代の緊張のうちに.....	24
宜	湾	朝	保	朝保	「まきちゆうほん」 「英雄」の不遇な晩年 廃藩の陰に.....	26
池	城	安	規	安規	「あいげんきく」 中央政府と折衝中に客死 琉球処分の苦悩を負い.....	29
津	波	古	政	正	「つはこせいせい」 世論の混乱に動ぜず 冷静に版籍奉還を主張.....	32
喜	舎	場	朝	賢	「きしゃばちゆうけんぱ」 琉球国王の身边守る 歴史の生きた記録者.....	34



田辺 尚雄	ひたさな お	沖縄芸能を賞賛 初めて中央に紹介……	192
謝花 雲石	うじやん せはな	正統書道を普及 「前衛」を嘆き「源流」守る……	195
山田 真山	やまざん	慰霊像建立に全力 明治神宮の壁画も描く……	198
高良 隣徳	りんか ともとく	沖縄二中の初代校長 「沖縄人の教育」につくす……	200
稲垣国三郎	くにがき くにさぶろう	綴り方教育 「白い煙と黒い煙」の作者……	203
志喜屋孝信	こうき や	戦後の初代知事 琉球大学学長も歴任……	206
比嘉 景常	けいじょう	画壇の基礎つくる 「琉球画人伝」を書く……	209
山田 有幹	ゆうま かん	社会運動に没頭 労働者の組織化図る……	211
末吉麦門冬	すえもんとう	史筆で名をなす 首里城の解体防ぐ……	214
胡屋 朝賞	あさしょう	神様のような先生 一貫した英語教授法……	217
山城 正忠	せいしゅう	与謝野鉄幹の門下 沖縄の短歌界を育成……	220
宮城 長順	ながじゆん	空手普及に功績 「剛柔流」を編み出す……	223
山之口 獺	たぬき	清貧に生きた詩人 高村光太郎賞を受賞……	226
折口 信夫	のりく お	民俗学に独自の道 3度も沖縄を訪問……	229

金城 清松	きんじょう せいしょう	医師と政治で業績 結核療養所を建てる……	232
富川 盛武	とみかわ せいぶ	剣道教師で活躍 武徳殿の建設に努力……	235
青木 恵哉	あおき けいさい	生涯を救らいに 屋我地に療養所建設……	237
上原 信雄	のうえ しのぶ	救らい運動に30年 根治に闘志燃やす……	240
船越 義珍	ふなごし ぎちん	空手普及に功績 「武道即芸術」を強調……	243
伊東 忠太	いとう ちゅうた	沖縄の文化財保護に尽力 首里城を破壊から守る……	246
柳 宗悦	やなぎ げん	独創的に民芸研究 沖縄方言の保護に尽力……	249
河井寛次郎	かゐり かんじろう	無位無冠の「陶工」 『火の誓い』で感動書く……	252
浜田 庄司	はまの じょうし	沖縄陶芸にほれる 一年余も壺屋で研究……	255
牛島 満	うしじま みつ	沖縄戦の総司令官 摩文仁で割腹自殺……	258
古賀辰四郎	こが ちしろう	尖閣列島を発見 初めて分蜜糖つくる……	261
島田 叡	あしま げい	最後の県政知事 一般・学童疎開を推進……	264
平良 辰雄	たらい ちゆう	復帰運動を展開 公選で群島知事に……	267
伊江 朝助	いゑ ちゆうすけ	貴族院議員に当選 沖縄問題解決に尽力……	270



将校になった。しかし、彼は少年たちと川で釣ばかりやって、いっこうに教練など強制しなかった。それがかえっていい結果をもたらしたので、それを買われた後年、彼は戸山学校、満州士官学校、予科士官学校、士官学校と、陸軍の四つの学校で学校長をつとめるという、異例の処遇を受けた。

牛島はまた一番乗りの名手でもあった。支那事変が勃発すると、彼は鹿児島島の歩兵第三六師団長として大陸へ渡ったが、そこで保定城、南京、武漢と三つの大きな戦闘に、例外なく一番乗りをはたした。彼の戦法は強行軍につぐ強行軍といったものだったが、自ら陣頭に立って進むので、部下も文句のいいようがなかった。それに捕虜をうまく使いこなして荷運びなどさせたが、牛島は決して捕虜を冷遇しなかったので、捕虜も逃亡したり反抗したりすることがなかった。

一九三八（昭和一三）年、牛島は陸軍予科士官学校長兼戸山学校長に任じられて、大陸から本土へ帰った。その後、一九四一（昭和一六）年には陸軍士官学校長に補せられ、そのまま教育家として静かな生活が続くかにみえた。が、太平洋戦争の急迫によって、事態は一変した。一九四四（昭和一九）年八月、彼は第三二軍司令官に命じられ、第一線におもむくこととなった。場所は、太平洋戦争の天王山といわれる沖繩島であった。

同年八月一日、牛島中将は参謀長の長勇中将ちやうい、さぶを従え、那覇飛行場に第一歩を印した。そして、首里城址に建つ沖繩師範学校内の軍司令部へはいった。そのころ、郷里の岩切鹿兒島市長から、牛島に桜島ミカンが贈られてきた。そのお礼状に牛島は、「米軍来襲せば一泡吹かせ申すべく候」と書き、胸中の成算を披瀝した。

が、状況はその後、急変した。比島戦で苦杯を喫した大本営は、一九四四（昭和一九）年一月、沖繩にあった第三二軍から精強な第九師団を引き抜き、台湾に転用するという策に出た。比島決戦

後、米軍が台湾へ来攻するという誤認からであった。それにたいし牛島は「第九師団をひき出されては、本島防衛の責務は果たせない。どうしてもひき出すというなら、第三二軍全兵力を決戦場に転用されたい」と、大本営に翻意をうながした。が、それはいれられなかった。

牛島は失望した。しかし、それを顔にあらわすことはなかった。牛島は微笑を失わず、最初の決戦方針をすてて、兵力の配備がえをおこなった。こうして、作戦主任参謀八原大佐の消極作戦に従うことになった。それは北・中飛行場を放棄して、南部の洞窟陣地で持久戦をするというものであった。

そのとき、すでに牛島は沖繩戦を投げていたかも知れなかった。一九四五（昭和二〇）年四月一日、米軍はついに沖繩本島に上陸した。作戦は八原の戦略どおりに進められ、牛島はほとんど作戦に口出しすることがなかった。それでも、五月四日には八原の意見を聞いて、総攻撃が強行された。そのとき、あくまでも消極作戦を主張する八原に牛島は珍しく怒声を発し、「わしはこの総攻撃にみずから軍刀をふるってまっさきに切り込もうと思っている。このわしの意志をなぜ実行させてくれぬのか」と、しかったという。

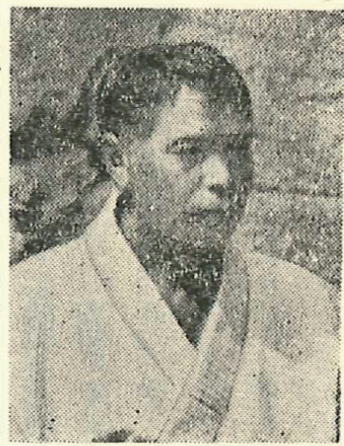
この総攻撃のすさまじさに、米兵のなかでは泣き叫びながら逃げまどうものもいた。が、物量を誇る米軍に、無手で勝てるはずもなかった。この日の総攻撃を最後に、日本軍は首里を放棄して摩文仁に敗退し、その洞窟陣地で六月二三日午前四時三〇分、牛島は長と共に自刃してはてた。古式による割腹自殺であった。①

↓島田叡

### 古賀辰四郎

燕尾服と安全カミソリとピストルと無人島と藍綬褒章と——いかにも妙なとりあわせであるが、古賀辰四郎の象徴となるものをすなおにならべてみたのである。





一八五六（安政三）年福岡県八女郡に生まれ、沖縄に来て、無人島探検を多くし、尖閣列島を発見、多くの水産業をおこし、はじめて分密糖を作り、真珠養殖をはじめると、殖産興業に功あり、一九〇九（明治四二）年藍綬褒章をおくられ、一九一八（大正七）年病没。六三歳。嗣子善次。

福岡県から那覇へきたのが一八七九（明治一二）年四月。寄留商人としては早いほうである。生家が茶を栽培、製造している中農で、茶を売りにきたというのであるが、「琉球」に目星をつけたいわれは何であつたらうか。それはともかく、この四月四日に廃藩置県で「琉球」は大動乱のまただなかであつたのに、そこに住みつく気になつたところに古賀辰四郎の真骨頂があるようである。このとき二四歳。のちに一八九七（明治三〇）年ごろ、台湾へ単身旅行をしており、日清戦争のあとのこととて用心のためにピストルを携行したが、一発も撃たなかつたと、ひとに自慢した。この旅行の目的が何であつたか、わからない。やはり探検がおもだったのであろう。琉球行きも、商売というより最初の探検のつもりだつたとおもわれる。とにかく、ひとのやらないことを試みる志が高かつた。

来た当時、夜光貝の殻がたくさん捨ててあるのを見て、その見本を神戸に送つたところ、貝ボタンの原料になるといふことがわかり、その輸出業をはじめた。茶の商売がおそらく邪魔つ氣だつたのではないか。ただ、しばらくは食うために仕方がなかつた。それでも夜光貝は年々一八〇二四万キロ（三〇〇四〇万斤）を移出し三年後には八重山に支店をおいた。「那覇の寄留商人」というのは、めずらしい。置県後、いわゆる頑固党の清国への嘆願使節が、八重山あたりで秘密裏ににぎわつていた時期である。

さらに二年後には、尖閣列島、仲の神島を探検し、一九〇二（明治三五）年ごろまでに、県下の無人島を探検した。大東島、ラサ島、赤尾礁（宮古の西北、一名大正島ともいう）、鳥島など。イキマ島というのが、宮古の南三〇海里にあるといふことで、一八八六（明治一九）年発行の海軍水路部の海図には明記されていたが、古賀はその地点を中心として周囲一〇海里にわたつて調査した結果、島影を発見しえず、イキマ島は存在せずと、海軍省に報告した。

尖閣列島を発見したのは日清戦争直前である。借地請願を政府へ出したが、政府では同島の所属不明なりとの理由で却下した。戦勝の翌年、三〇年間無償借地の許可をうけた。その前年、本籍を沖縄に移した。腰をおちつけるに足ると考えたらしい。一九〇〇（明治三三）年に、理学士宮島幹之助（北里研究所技師をへて、のち慶大医学部教授）と沖縄県師範学校教諭黒岩恒とに委嘱して、尖閣列島の風土病、伝染病、ハブ、イノシシ、その他の有害動物の有無や飲料水の適否などを調べさせ、その結果マラリア、伝染病はなく、ハブ、イノシシなどは生息せず、四島のうち魚釣島にのみ湧水のあることが発見された。尖閣列島とは、このとき黒岩の命名による。翌年、県技師熊倉工学士の援けをえて、苦心のすえ防波堤を築き、家屋や水タンクをつくり、人の居住環境を整備した。定住移民五〇人をひきつれてはじめた産業経営は、鳥毛の採集、水禽の剥製、フカヒレ、海參、貝殻、べつ甲の採集、鱧漁、鰹節の製造、植林（樟、松、杉）、みかん類の栽培、開墾及び穀菜の栽培、珊瑚採集、牧畜、養蚕、燐鉱、鳥糞の採集など多方面にわたつた。移住労働者の募集には、はじめほど苦労したが、事業の発展で一九一〇（明治四三）年頃には、出稼ぎがふえた。

一九〇五（明治三八）年に自宅の倉庫に二馬力石油発動機一台に遠心分離機二台、砂糖煮釜一個をすえつけて、白下糖を原料として分密糖を製造した。技師には香川県から水谷某、発動機の運転には



福岡県から鶴某を招いた。農商務省では、その翌年に沖縄県庁内に臨時糖業改良事務局をおき、さらに三年後はじめて一〇〇トンの機械をすえて政策的に分密糖製造をはじめた。先覚者の古賀は、ひきあわなくなつてやめた。

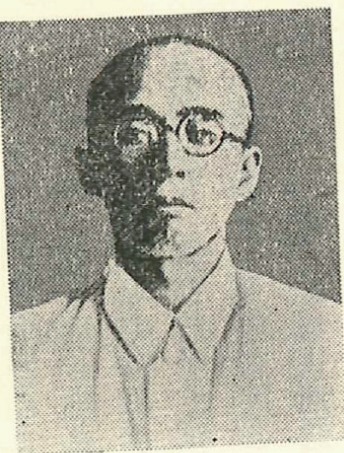
天然真珠を採取して、内国博覧会やパリの万国博覧会、ロンドン、セントルイスなどの博覧会に出品して受賞したが、大正初期から石垣島名蔵湾に御木本幸吉と共同出資で真珠養殖をはじめ、のち川平湾に移した。

一九〇九（明治四二）年殖産興業の功で藍綬褒章を下賜された。沖縄での第二号である（第一号は松田和三郎）。古賀が第一号をかちえたものに燕尾服（第二号は当間重慎）、安全カミソリ、ピストルなどがあるが、これらよりさらに、やはりあれだけの探検と産業とをあげるべきであろう。だが、古賀のために惜しむらくは、尖閣列島の産業が時代にとりのこされ、のちに隆盛をみた大東島をせっかく占有権をにぎっていたのに荷が重いとして玉置半右衛門に譲ってしまった、真珠養殖も御木本に譲ってしまったなど、すべてが偉大な習作におわってしまった。それでも彼はパイオニアとして満足であったのかもしれない。意気さかんな洒落者古賀辰四郎の手形を、失われたロマンのために、せめてはこの記録にとめておかねばなるまい。◎

島田 穀

↓黒岸恒

沖縄県政六六年の特質を「ある皇民化の過程」として要約することもできよう。その間、官選県知事二七代のうちには、さまざまの人がいて、それぞれの流儀でこの「皇民化」を推進した。皇民化教育という、この奇妙な押しつけがましい哲学は、知事の個性差によって、さまざまの色あいをみせたが、皇民化の総決算が沖縄戦における県民の悲劇であるとすれば、県知事のそれへの向かいかたとし



一九〇一（明治三四）年神戸市に生まれ、神戸二中、三高をへて、一九二五（大正一四）年東大法学部卒、佐賀県書記官をふりだしに、おもに内務官僚として歩み、一九四五（昭和二〇）年一月一二日沖縄県知事拝命、三十一日赴任、沖縄戦に殉職、月日不詳、四四歳。島守の塔にまつられる。て、われわれは二人の対照的な典型をもった。二六代泉守紀と二七代島田穀とである。

一九四四（昭和一九）年七月一日に就任した泉知事は、同じ月にサイパンが失陥していろいろ、ふくらんでくる不安感のただなかに、二月末ついに出張名目で離県し、そのまま香川県知事へ転じた。沖縄戦は時間の問題だとされていた。後任知事にたいする心ある県民の希求は、①県庁職員の陣頭指揮者としての智と勇とをそなえた人物であり、②沖縄軍司令官と官等級で同級の知事であること、ということであった。政府でもこのことは人選の基準としてほいたにちがいないが、もうひとつ内務省の悩みは、後任知事が「死地におもむく」運命をになつていくということであった。そして第一候補者に大阪府内政部長島田穀をあげ、ことわられたときの用意にあと二三人を考えていた。しかし、島田はあっさりひきうけた。政府もおどろいたが、もっとも強い衝撃をうけた家族へ、島田はいった。「おれは死にたくないから誰かやればいいじゃないか、といえるものではない」。

一九四五（昭和二〇）年一月三十一日、島田は文字どおり単身、随員も連れずに、トランクのなかに

拳銃二丁と『大西郷遺訓』と『葉隠』とをもって、着任した。臨戦知事の任務は軍との絶対の協力体制のもとに、人口疎開と食糧確保を重点として、県民に不安をあたえないことであった。一〇・一〇空襲のあと、県庁は焼けのこつていたにもかかわらず、前任



編者・執筆者紹介

- 新里 金福 あきざと きんぷく 1922年 沖縄県宮古島で生まれる。評論家。『歴史の旅沖縄』『沖縄の思想』ほか。
- 大城 立裕 おおしろ たつひろ 1925年 沖縄県中城村で生まれる。作家。1967年 第57回芥川賞受賞。『カクテル・パーティ』『琉球処分』ほか。
- 琉球新報社 りゅうきゅう しんぱうしゃ 1893年 創刊。沖縄を代表する日刊紙（朝・夕刊）の一つ。沖縄各地に9支局をもち、本土には東京支社をはじめ大阪・福岡・鹿児島に支局がある。

沖縄の百年 第1巻=人物編 近代沖縄の人びと

1969年10月30日 第1刷発行 ￥680

著者 新里金福・大城立裕  
編者 琉球新報社  
発行者 東京都千代田区西神田 石合ビル 崔容徳  
印刷者 協和印刷・光陽印刷・大我堂印刷・道野整版所

発行者 東京都千代田区西神田1-2-15 石合ビル  
株式会社 太平出版社 ©

振替東京99563 電話東京291-9744・9752, 294-7083

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

戦になり、敗戦によって、沖縄は戦後のアメリカ軍統治時代にはいる。

このような歴史の流れを踏まえて、われわれは「沖縄百年」を多面的・立体的に浮び上らせるために、沖縄そのものを肯定的な面からも、あるいは否定的な面からも同様にとりあげてゆくことをねらいとした。したがって時代区分も単なる「明治・大正・昭和」期といった年号の区分にこだわらず、「歴史編」では事件を中心に時代の背景がわかるように工夫した。

また歴史が人物を生むのか、人物が歴史をつくるのかは絶えず論議のわかれるところだが、「人物編」では有名無名にかかわらず沖縄近代史の形成になんらかの役割を果たしたもの、あるいは正當に評価されるべき人物を、選考委員会に諮っておよそ百余人を選定、この人たちを骨とし、その周辺を肉として時代をえがくことをねらいとした。現存の人物は七〇歳以上の人とすることを原則とした。

しかし実際の作業にかかってみると、あるていどは予想されていたとはいえ、資料収集の面でかなりの困難にぶつかった。沖縄戦でこれらの多くは焼滅あるいは散逸し、遺族のありかもわからぬ場合が多かった。また遺族とインタヴューしても、すべての財産を焼失し、いのちから逃げのびたため資料らしい資料が得られぬことが多かった。執筆者を東京と沖縄の両方にわけて依頼したのも、東京のほうにもかなりの資料が保存されていると考えられたからである。

このような苦労と困難があったにもかかわらず、できあがった「沖縄百年」は、従来の「沖縄史」や「日本近代史」では無視あるいは忘れられてきた多くの問題に光をあてることに成功し、最近のいわゆる「沖縄もの」に見られない深さをもつことができたと自負している。

さいごに、これを単行本として出版の労をとって下さった太平出版社に感謝申し上げます。

琉球新報社 編集局長 長嶺 一郎